



Research Office Newsletter

Interview with Professor Marian Beise-Zee

2020年度最初のResearch Office Newsletterは、4月より国際協力・研究部長に就任された Marian Beise-Zee教授へのインタビューです。お楽しみください！

Research Office : Beise-Zee教授、国際協力・研究部長へのご就任おめでとうございます。先生は、ドイツのマンハイムにあるライプニッツ欧州経済研究センター（以下、ZEW）で研究者としてのキャリアをスタートさせたと聞いております。研究者になろうと思ったきっかけを教えてくださいませんか？



Beise-Zee教授 : 私は大学最後の1年間、ZEWでアルバイトをしました。各国の競争力を測定し、それを国際的に比較するための指標体系を構築しようとする研究プロジェクトの一員でした。そのプロジェクトはとても興味深く、他の授業はそっちのけでプロジェクトに取り組みました。それでもすべての科目の単位を取得し、卒業することができましたが、このときすでに研究を続けたいという気持ちははっきりしていました。トレンドや隠れたパターンの統計を探るプロセスは、おそらく私の性格によく合っているんだと思います。大学時代に何かに情熱を感じた学生は、勇気を持ってそれを追求すべきだと考えています。私は、ちょうどいいタイミングで研究への情熱が湧いてきたためとても幸運だったと思います。このようにして、私は設立間もない研究機関ZEWで研究者として働き始め、そこで9年間を過ごしました。

Research Office : ZEWではどのような研究をなさったのですか？また、ZEWでの研究は研究者としてのキャリアにどのような影響を与えましたか？

Beise-Zee教授 : ZEWでは、まず企業が公的研究活動からどのように利益を得ているか研究しました。これは、科学がどのようにしてだれもが恩恵を受けられる新しい技術や製品を生み出すのかを理解する上で重要な要素です。政府は、公的研究から得られたすべての知見を企業が迅速に活用できるようにしたいと考えているため、この技術移行を促進する条件を特定することが不可欠です。私たちはドイツの各地域におけるイノベーションと科学活動に関する大規模なデータベースを収集し研究をしました。例えば、企業と公的研究機関の地域的密接性が重要であるかどうかといった内容です。その研究結果は新聞に大きく掲載され、大きな注目を集めました。また、別の研究では、ファクシミリや携帯電話のようなグローバルイノベーションが成功した理由、特に最初にとある国で採用され、そこから世界的な成功を収めた理由を探りました。この研究は、新製品や新技術を早い段階で採用するだけでなく、これらの技術を他国にもたらすために初期の成功を活用できる国の市場を支援することへの関心につながりました。しかし、それと同時に政府がイノベーションの成功に与える影響は非常に限られていることにも気づき始めていました。この研究を通して、競争市場における成功の条件を理解することができ、それがこの後の研究者としてのキャリアに大きな影響を与えました。

Research Office : 先生はタイのアジア工科大学でも教鞭をとっていらっしゃいましたね。その間、メディカルツーリズムに関して研究をなさっていたとのことですが、ぜひその研究のお話を聞かせていただけますか？

Beise-Zee教授 : 当時私は、タイにおいて最も技術的に進んでいて革新的な側面の一つである観光、特に医療とウェルネス・ツーリズムについて研究したいと思っていました。バンコクの多くの病院は、外国人患者の治療を行い、成功しています。これらの病院は優れた医療を提供するだけでなく、世界で最も優れた顧客サービスを提供しています。このことは、メディカルツーリズムが画期的な新しい医療形態である理由を説明しています。しかし、なぜ人々が病気のストレスを抱えながらも異文化の国、特に発展途上国へ出向くのか、その理由は想像できませんでした。そのため、私は博士課程の学生とともに、なぜ西洋の患者が医療を求めタイに行くことを決意したのか、その理由を説明しようと思いました。私たちは、タイで最大級の病院にて外国人患者にインタビューを実施し、質的研究を進めました。この研究が倫理的にも非常にデリケートな研究であることを考えると、病院から調査の許可と支援を得られたことはとても幸運なことでした。私たちは、ここでの調査結果に基づき、医療ツーリズムの概念モデルを考案しました。このモデルは、メディカルツーリズムに対する動機が時間と共に変化することを示唆しています。



Beise-Zee教授と学生がインタビューを行った Bumrungrad病院（タイ・バンコク）

多くの患者が、初めて治療のための海外渡航を決断するのは、自国の医療費が高額すぎたり、何か他の問題を抱えていたり、自国の医療状況に不満を抱いているからであることがわかりました。しかし、渡航先の病院で素晴らしいサービスと丁寧な治療を受けた後、患者は徐々に病院と心を通わせるようになり、次の治療が必要になったときにはまた喜んで戻ってくるのです。私は、メディカルツーリズムはサービス管理についてたくさんのことを教えてくれると考えています。

Research Office：現代社会において、メディカルツーリズムは確かに注目を集めています。先生の研究が多くの人の役に立っているのではないのでしょうか。メディカルツーリズムのほかにも、サービス産業について何か研究したことはありますか？

Beise-Zee教授：はい、観光分野の別の研究では、ビジネス旅行者に焦点を当てた研究を行っています。彼らは、旅行中に働かなければならないため、通常の旅行者とは違う点がたくさんあります。ビジネス旅行者の多くは、旅行中に退屈だと感じたり、不安な気持ちになったりとさまざまな感情を経験することがわかりました。したがって、サービス提供者はビジネス旅行者のこれらの感情を認識し、それに応じた対応をする必要があります。ビジネス旅行者は、ホテルスタッフからのサポートを期待するだけでなく、彼らを疑似的に同僚とみなすことが多いのです。これは、サービス・マネジメントの中核概念であるサービス・コクリエーションとも呼ばれる顧客と企業の価値共創の一例です。観光学とサービス管理は非常に密接に関連しているといえるでしょう。

Research Office：APU着任後の研究では離散選択分析（コンジョイント分析としても知られる）の研究をされていますが、この言葉が何を意味するのか、私たちの日常生活にどのように結びついているのかを教えてください。

Beise-Zee教授：「離散選択分析」という用語に慣れていない方もいらっしゃるかと思います。離散選択モデルとは、複数の離散的な（すなわち分離可能な；相互排他的な）選択肢から選ばれるものを説明したり、予測したりするために使用されます。私がこの離散選択モデルについて関心を持ったのは、研究におけるデータ収集の方法に対して抱いた不満がきっかけでした。研究者は数多くの調査を行いますが、人々の意識に関する質問をしても、多くの被験者は正確かつ偏りなく回答することができないため、得られる情報は限定的なものとなります。例えば、多くの調査では、1から7のスケールで被験者が自身の意識や傾向を判断し回答することが求められますが、実際には、私たちの頭の中には測定基準がないため、これを正確に行うことは非常に困難です。しかし、我々が知りたいことを選択肢に落とし込むことで、提示された選択肢から選ぶという誰もが持つ能力を利用することができます。これは日常的に購入する製品だけでなく、仮想の選択肢についてもあてはまります。例えば、特定の状況を提示し、それを好むかどうかを尋ねます。私たちは生活の中で毎日さまざまな決断や選択をしているので、このプロセスは人々の好みを測るための自然な方法であるといえるでしょう。このアプローチの素晴らしさは、健康、環境保護、政治など、人に関わるほぼ全ての研究領域で使用できることです。また、この方法の強みは、製品や状況の異なる属性が同程度重要だと思われる場合、これらの属性にはトレードオフの関係が存在するため、我々は難しい選択を迫られ、どちらかを諦めざるを得ないという点にあります。

Research Office：難しい言葉に聞こえましたが、私たちは日常的に離散選択分析を行っているということですね。この分析を使って行った具体的な研究の例はありますか？

Beise-Zee教授：数年前、私はマールブルグ大学の開発協力経済研究グループのプロジェクトに参加しました。これは、開発成果に対する住民の選好を基に最適な経済開発政策を特定するための研究プロジェクトで、メンバーは、南部アフリカのオカバンゴ川流域の住民を対象に意思決定調査を行いました。この研究では、アンゴラ、ボツワナ、ナミビアの流域国境地域の村に住む約800世帯に、生活状況に関する将来のシナリオを描いたカードを提示し、より良いと思うものを選んでもらうというプロセスを何度も何度も繰り返しました。提示した生活シナリオのカードには、水へのアクセス、家畜放牧、一定レベルのインフラ、森林、野生生物など、さまざまな要素がさまざまな組み合わせで含まれています。被験者となった世帯主の人々は、絵に描かれたこれらの状況がどれだけ魅力的かランク付けをするよう求められました。この意思決定分析により、どのような生活シナリオが最も好まれ、それぞれ特徴が他の特徴と比較してどのような価値があるのかを明らかにしました。例えば、水へのアクセスと放牧の機会は、森林や野生生物といった項目よりもはるかに重要と考えられていました。この調査結果によって、政策立案者やNGOは、より望ましい開発目標に資源を投入することができました。



Beise-Zee教授と学生がインタビューを行ったBumrungrad病院（タイ・バンコク）

*出典：Bumrungrad病院ホームページ (<https://www.bumrungrad.com/jp>)



南部アフリカのオカバンゴ川流域の住民を対象に行った意思決定調査で使用した生活状況に関するシナリオを描いたカードの例

Research Office : とても興味深いですね。さて、最後の質問となりますが、来年度の研究者としての抱負をお聞かせください。

Beise-Zee教授 : 離散選択分析を用いた新たな調査方法の研究を行いたいと考えています。良質な調査から得られた無作為標本はとても高価です。だからと言ってクリップボードをもって道行く人々に尋ねても意味はありませんし、その答えがその集団の考えを代表しているとは限りません。そのため、専門的な調査機関による正確なデータを入手するためにも、まずは研究費を獲得したいです。したがって研究費の執行を支援するリサーチ・オフィスは私の研究プロセスの中で非常に重要な役割を果たしているといえるでしょう。



バンコクにてノーベル平和賞受賞者Muhammad Yunus氏（右から3番目）

Research Office : ありがとうございました。

リサーチ・オフィスとしても先生方の期待に応えられるよう、精一杯サポートして参ります。

Events CIL主催フォーラム Inclusive Leadership: Key For Future Japan

インクルーシブ・リーダーシップセンター（CIL）主催のフォーラムが2月7日、立命館東京キャンパスで開催され、企業や教育機関などからさまざまな見識を持つ101名の方が参加をされました。

フォーラムでは、CILセンター長であるLailani Laynesa Alcantara教授がセンターの目的や研究計画を発表したほか、東京大学の上野千鶴子教授による基調講演「超高齢社会日本の課題：官民協私連携へ向けて」、出口治明学長をモデレーターとしたパネルディスカッション「Inclusive Leadership: Key For Future Japan」が行われました。



フォーラムの様子は、Youtubeにてご覧いただけます。

CLE AY2019 Division Initiative Program Retreat Workshop開催

2月13日に、言語教育センター（CLE）の教員により「発達障害」「言語学習」「学びのユニバーサルデザイン」をテーマとしたAPU Center for Language Education AY2019 Division Initiative Program Retreat Workshopが開催されました。このワークショップでは、それぞれのテーマについて研究を行うCLEの教員が自身の研究内容を共有し、学習障害、ASD、ADHDに代表される発達障害などで学びに困難を抱える学生の支援方法について議論が行われました。2018年度プログラムリーダー住田環准教授、2019年度リーダーJUNG Jonghee 特任講師」の他、本田明子教授、寺嶋弘道准教授、ベルガー舞子准教授、石村文恵特任講師、衛藤智子特任講師、張文青特任講師、DIAZ Anthony嘱託講師、MORALES Rama Alejandro嘱託講師がプログラムメンバーとして研究を続けています。



科学技術振興機構（JST）の研究助成採択：Peter Mantello教授



Peter Mantello教授が国立研究開発法人 科学技術振興機構（JST）と英国のUKリサーチ・イノベーション（UKRI）傘下の Economic and Social Research Council（ESRC）による研究助成に採択されました。研究プロジェクトタイトルは、「都市における感情認識AI ～日英発倫理的生活設計に関する異文化比較研究」です。本プロジェクトは、日本の研究チームとイギリスの研究チームの共同研究プロジェクトでAPUからは、研究代表者Peter Mantello教授の他、Nader Ghotbi教授が参加しています。2人は日本チームとして、明治大学の田中洋美准教授、中央大学の宮下紘准教授とともに研究を行います。



詳しい情報は、こちらから。

研究／教務支援HP開設

教員向けの「研究／教務支援HP」を開設いたしました。研究・教務に関する情報を提供しております。（教務支援部分は2020年秋 Semester に開設予定です。）下記QRコードよりアクセスいただけますので、ブックマーク登録をお願いいたします。



研究／教務支援HP

2020年度学内研究助成

2020年度学内助成制度の情報が研究／教務支援HPに掲載されました。制度の概要や申請方法等につきましてHPに掲載されている募集要項からご確認いただけます。申請、お待ちしております！

助成制度名	申請時期
学術研究助成（特別研究奨励金）	申請不要（科研費採択者への補助）
学術研究助成（科研費再応募型）	対象者に個別通知
研究成果発信助成（学会発表サポート）	2020年4月1日（水）～2021年1月8日（金）
研究成果発信助成（投稿サポート）	2020年4月1日（水）～2021年2月26日（金）
研究成果発信助成（出版サポート）	2020年4月1日（水）～2021年2月26日（金）
研究成果発信助成（論文掲載者奨励費）	2020年4月1日（水）～2020年5月29日（金）

Research Office Facebook Page

Research Office Facebookページでは、教員や学生による研究活動の情報を定期的に発信しております。教員が執筆した書籍・論文などの紹介や、学生による学会発表の様子など、配信内容はさまざまです。オンラインで公開されている論文や記事は実際に内容をご覧いただけます。APUという国際的な環境で、日々どのような研究が行われているのかを知る良いチャンスです。

ぜひフォローしてみてください！

また、「もっとこんな情報が知りたい」「自分のこんな研究も紹介してほしい」等のご要望がございましたら、ぜひリサーチ・オフィス（ropa@apu.ac.jp）までお問い合わせください。お待ちしております！



Research Office Facebook Page

<https://www.facebook.com/apuresearch/>